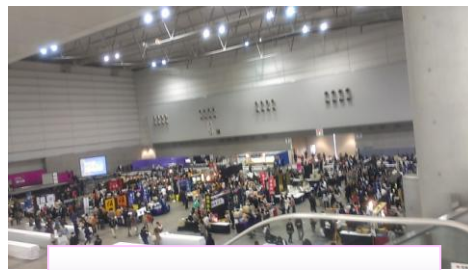


第十回新潟「酒の陣」

こんにちは、サーマルタンクの新洋技研です。お元気ですか？今年も例年にも増してスギ花粉の大量発生で、私も散々な目に遭っております。医者で薬を処方してもらえば良いものを、元来の医者嫌い・薬嫌いから、なんだかんだと理由をつけて行っていないのが悪いのですが・・・(汗) 目はかゆい、鼻はグスグス、くしゃみの連発で外へ出るときはマスクが手放せない、そんな有様でこの3月の第3土曜と日曜に開催された「新潟酒の陣」へ行ってきました。今年で第十回となるこのイベントは、一昨年の東日本大震災で急遽中止となった以外毎年開催されました。



二日目の会場風景。終了間際に撮影

で成長しています。私が訪れたのは日曜の午後少し遅めだったため会場内は予測していたよりは混んでおらず、スムーズに会場内を回れたのですが、前日の入場者数は5万3千人(！)だったとのこと。「盛況なのは嬉しいことだが、お客様とゆつくり話すことも、得意先の方への挨拶も満足に出来なかつた、その辺のコントロールは難しいよね」と蔵元さんたちは言っておられました。今年も若い女性の姿が昨年より多いとのこと。日本酒への関心が若い世代にも広がりをみせることは明るい題材です。で、その若い女性たちが関心を寄せるのはどんなお酒なのか、と見ていたら、ビンの色、形、ラベルのデザインが従来のものとは異なる商品に結構目を向けていたように感じました。もちろんお酒の味も重要ですが、やはり外見でそのお酒の味のイメージを想像させることはどうも大切な要素のようです。また会場でのお酒の売れ行きは昨年より良かったとのこと。その理由の一つとして会場内のレイアウトが影響しているのではないかと、言われていました。確かに会場を見たとき、昨年に比べ今年はブース間が広く、人の流れがスムーズになるようなレイアウトに工夫されているなど感じました。ただマスコミの取材で来場者の「1年に一度の行事だから(この機会に)いっぱい飲みます」というようなコメントがあった由、普段から愛飲してもらおうことを意図しているであろうはずのイベントが、日常にはなかなか反映し辛い現実も感じさせられました。しかし、来場者が試飲して「おいしい！」と顔をほころばせながら、あちこちのブースへ向かう姿を見ると、運営側も出展される蔵元も大変でしょうが、このような蔵元と消費者のコミュニケーションの場を持ち続けることは、とても大切なことなのだ、と思いつつ会場を後にしました。

日本の野鳥シリーズ

サンコウチョウ伊達姿の効用

技術営業部 佐藤 弘

鳥の尾は何の為にあるかと考えると、方向を変える舵であることをまず思いつく。他にもブレーキとして使うし、ホバリングをする連中は羽ばたきながら広げた尾に風を受けて、器用に空中で停止する。それらの機能に共通して言えるのは、尾が長いほど、つまり尾羽の面積が大きいほど効果的であることだ。

だが、ものには程度がある。本種オスの中には、12枚ある尾羽の中央2枚だけとび抜けて長い個体があって、仲間の計測に255mmの記録がある。体はスズメより少し小さめだから「冗談やめなさい」と言いたくなる長さだ。でも、どの図鑑を眺めてもその長さについて解説は見当たらない。とも角ここ迄長いと、メスにモテたい為の、実用域を離れた飾りだろうと考えていた。

しかしその飛び方を観察した際に、尾羽のしなりで空気を後ろに押しやる反力が前進力になっている事に気づいた。クジラ類のドルフィン・キックと同じ理屈だ。但し、クジラとの決定的な違いは、筋肉を使って意図的に尾を上下させるのではなく、振れ幅は小さいものの、キツツキ類同様の波状飛行で体が上下する結果、長い尾が自然にしなることだ。私の知るかぎり、尾羽のしなり復元力を推進に使う鳥は日本では本種だけだ。

鳥に明るい方は「キジ・ヤマドリのオスの尾もずい分長いけど、あれはどうなの？」とおっしゃるか。でも彼らは波状に飛ばないから尾羽はしならない。あれはメスの気を引く飾りだ。

尾羽の中央2枚だけ長いのは、それなりの必然がありそう。すべて長かったら尾羽面積が大きくなって力が分散するから、尾羽はしならない。また、左右両端の2枚だけ長ければ、もしも片方が抜け落ちたらバランスよく飛べない。

尾羽はたいへん抜けやすいこと、そして、程なく再生することを皆様ご存知であろうか。これにはトカゲの尻尾切り同様に、捕食者を混乱させる狙いがあるようだ。その様に生きのびてきた鳥の祖先は恐竜だと教わった。しかし最近では、鳥は現代に生きる恐竜そのものだと学者は言う。こんなにも進化した連中が…信じられない。

“長調、短調”

生産部部长 山本知男

音楽には長調、短調という調子があると言う事を昔習った事があると思いますが、覚えてますか？簡単に言えば明るく聞こえるのが長調、暗く聞こえるのが短調となります。この調子と詩がうまく絡まると心に残る曲が出来るのですが・・・、最近の曲はリズム感が良く、ノリ良く、聞き流す感じだと非常に心地よく聞ける曲が多くて、でも詩の方はリズムに合わせて韻を踏んだ言葉遊びになっているような気がします。つまり詩が後付けになっている（全部そうではないですけど）。昔の曲は詩があって、その作者の意図を載せて曲作りを行っていたので、曲を聞くとその曲想が思い浮かぶ様子になっていました。

例えば「犬のおまわりさん」。(妙な例えですが) “迷子の迷子の子猫ちゃん、あなたのお家はどこですか？” という最初の所は長調です。これは迷子になって困っている子猫ちゃんに、やさしく安心させようと言葉を掛ける場所なので長調になります。“名前を聞いても分らない、お家を聞いても分らない、ニャンニャンニャン・・・、泣いてばかりいる子猫ちゃん” で短調が変わります。当然子猫ちゃんはパニックで不安で悲しい気持ちでいっぱいなので短調になります。“犬のおまわりさん、困ってしまっワワンワワン・・・” と、困ってしまったのに長調に戻ります。これは泣いてばかりの子猫ちゃんに、まずは安心させる。私に任せなさい、きっとお家まで送り届けてあげるよ、そして町の安全は私が守るんだ、と言う気概も込められるので長調になるわけです。このように歌を聞けば作詞者の意図も分ってくる。こんな感じで人との対話でも相手の意図が掴めると便利なんですけどね・・・。

言葉を曲にするとすると最近の「レ・ミゼラブル」のようにミュージカルになるし、でもそれはそれで日常では無理。相手の本意を分ると言うのは非常に難しく、それが出来れば仕事も人間関係もすんなり行く訳で、簡単には行かないですね。で、時々相手の話と噛み合わなくてトンチンカンな感じになって・・・、本意とぜんぜん違う話になって行く、これが調子っぱずれと言う事になります。音楽も人間関係も本意と違うところに進んで行くのは調子狂うわけです。

◆ ちょっと豆知識 ◆ その16

酒屋のバイブル

技術営業部 課長 成田 護 (mamoru@shinyo.co.jp)

私が尊敬する杜氏は数多く居られますけれど、十分な経験を積んでいて、分からないことなんて無いんじゃないかという方でさえ、皆さん口を揃えて「毎年勉強」とおっしゃいます。

ちょっとしたことを調べたりするのに、参考書的なものを手元に置いておくことはよくあることと思いますが、酒屋の皆さんは普段どんな本をご覧になっておられるのでしょうか。

製造関係の方であれば、「酒造講本」は入門書。ちょっと高度なことが知りたければ「清酒製造技術」ということになるでしょう。

「やさしい清酒の貯蔵・出荷管理」や「日本酒用資材 Q&A」なんかは、平易な現場向けの解説書ですし、きき酒を体系的に勉強しようと思った時には、佐藤信先生の「官能検査入門」なんかを穴が開くほど読みました。

「所定分析法注解」なんかも、じっくり見てみると「へっ」という発見があり、読み物としても非常に面白いものだと思います。

業界の百科事典的な書籍としては、「改訂 灘の酒 用語集」があります。物理・化学の基礎から酒屋の道具の解説、酒税法、果ては写真集まで付いていて、私が言うのもなんですが、「近年まれに見る名著」だと思います。私は自宅と職場にそれぞれ1冊ずつ置いています。

営業に近い方々だと、定期的に日本酒の特集が組まれる「dancyu」や「一個人」、「男の隠れ家」あたりが、マーケットのトレンドや、「流通が仕掛けたい酒」の雰囲気や掴むのに重宝する書籍でしょうか。

情報の入手先が、「専らインターネット」という時代になって久しいですが、深く知ろうとすると、今でも本の方に軍配があがるように思います。

本を読む時間が取れないのが、一番の問題なのですが・・・。

渋谷行ってきた

エッセイ

生産部主任 島貴 修一

さあ撮るぞ。電車から降りてバッグからカメラを取り出す。広角レンズ付きを首から胸に、ズームレンズ付きを右肩に下げて構内を見渡せば、似たような恰好をした者が大勢いるではないか。やっぱり考えることは皆同じなんだと納得しながら、勝手知ったる東急渋谷駅で撮影を始めた。最初に1・2番線ホーム先端へ行ったが、すでに同業者の群れに場所を占領されており、彼らの肩越しに入線してくる電車を撮る。次に反対の屋内方向にカメラを向け、ホームの屋根が作る影のコントラストを生かしながら駅員と乗客を撮る。そんな時、端にある降車ホーム先端に十数人の人達が集まってきた。ズームの望遠側でアップにして見たら、見覚えのあるサングラスをかけた顔が見えた。なんとタモリだ。

タモリを含む芸能人5人が、駅員の制服姿でコンパクトカメラを持ち、写真を撮るようなポーズをしている。傍にテレビの撮影クルーがいたのでタモリ倶楽部のロケかも。

その後屋内に入り行先表示板・駅名表示板・発車時刻表といった案内表示を、電車や乗客と組み合わせた構図で撮る。4線全体を覆う大きな屋根の下に頭端式ホームが並び、なんとなくヨーロッパの駅(行ったことないけど)の雰囲気を感じる。解体するのは惜しいな。最後に中央改札口を内側から撮ってから改札の外に出て振り返り、頭上の中央改札口の表示を入れながら改札口全体を撮った。もう二度とこの場面を見ることは無い。写真だけでなく記憶にもしっかりと保存しておこう。

次回作は六本木・麻布編です。ヒルズの麓から南麻布まで好奇心の赴くままに散策(徘徊かな)してきました。